

# 病害虫発生予察特殊報第 1 号

病名	ピーマンえそ斑紋病（仮称）
病原ウイルス	インパチェンスえそ斑紋ウイルス <i>Impatiens necrotic spot virus</i> （INSV）

## 1 発生状況

6 月上旬、東信地区で栽培されている施設カラーピーマンにおいて、下位葉に大型のえそ輪紋症状を呈するウイルス病と考えられる障害が発生した。TSWV、INSV の簡易検定キットを用いて検定したところ、TSWV については陰性であったが、INSV については明瞭な陽性反応を示した。そこで、秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科に検定を依頼した結果、電顕観察により球状粒子が観察されるとともに、RT-PCR によって INSV が検出され、本ウイルスによる病害であることが明らかとなった。また、その後の調査で北信地区の施設カラーピーマンでも発生が確認された。

INSV によるウイルス病の発生は、本県ではトルコギキョウ(昨年特殊報で報告)の他、シクラメン、アネモネ、アルストロメリア等ですでに確認されている。また他県でも、静岡県のトルコギキョウ、バーベナ、岡山県のシネラリア、トマト、インパチェンス、ベゴニア、福岡県のインパチェンス、神奈川県のプロックス、ミムラス、栃木県、山梨県及び山口県のシクラメンで確認されているが、生食用ピーマンで発生が確認されたのは今回が初めてである。

## 2 病原ウイルスと本病の病徴

INSV は TSWV と同じ *Tospovirus* に属し、多犯性で広範囲な草花・花木類・観葉植物に感染する。海外では花き類を中心に 34 科の植物で被害が報告されており、花き類の重要病害となっている。

本ウイルスは主にミカンキイロアザミウマによって媒介されるとされているが、他のアザミウマ類による伝搬については不明である。種子伝染、土壌伝染およびアブラムシ類による伝搬はしないが、汁液では伝染可能である。本ウイルスの粒子は非常に不安定で、特に高温期には汁液伝染しにくく、また病徴部位からでないとは検出しにくいとされている。

カラーピーマンにおける病徴は、主に下位葉に大型のえそ輪紋を生じ、株によっては上位葉や生長点付近に明瞭なモザイクや淡緑化を呈するものも観察された。

なお、7 月上旬の調査によると、発生ほ場での病徴は高温によって不明瞭になっており、果実における症状も確認できていない。

## 3 防除対策

- (1) 本ウイルスを媒介するアザミウマ類の防除を徹底する。特に育苗期に感染すると多発を招くので、この時期のアザミウマ類の発生に格別注意し、発生を認めたら直ちに防除を実施する。
- (2) 施設の開口部には、寒冷紗を張るなどしてアザミウマ類の侵入を防ぐ。
- (3) 施設内の不要な花き類は、アザミウマ類の好適な繁殖場所になるので除去する。
- (4) ウイルス症状を呈した植物を施設内に持ち込まない。
- (5) 発病株は次の重要な二次伝染源になるので、見つけ次第直ちに抜き取り、施設外へ持ち出して土中に埋める等適正に処分する。
- (6) ほ場内や周辺の雑草は、本ウイルス病の伝染源やアザミウマ類の繁殖場所となるので、除草を徹底する。